

「悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす」

2015年07月02日

ルカによる福音書8章26節～33節。一行は、ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。」イエスが、汚れた霊に男から出るように命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。イエスが、「名は何というか」とお尋ねになると、「レギオン」と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである。そして悪霊どもは、底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。ところで、その辺りの山で、たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと、イエスはお許しになった。悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んだ。

誠にオドロオドロしい奇妙な出来事である。主イエスの宣教団は異教のゲラサの地に着き、陸に上がった。そこへ、この町の悪霊に取りつかれている男が現われた。彼は衣服を着けず、墓場を住まいとし、時々凶暴になる。町の人々は彼の凶暴性を恐れ、鎖でつなぎ、足枷をはめて監視していたが、それらを引きちぎり、荒野へ向かう。狂気の人になったのである。主イエスが悪霊に男から出て行くように命じられると、彼はわめきながらひれ伏し「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」と大声で叫んだ。人々は主イエスの正体を悟らないが、悪霊に取りつかれた人はすぐに主イエスを神の子と認識し、恐れる。神から遠い人ほど、主イエスの「聖」に怯える逆説である。主イエスが「名は何というか」と尋ねると「レギオン」と答えた。そして、レギオンの悪霊は底なしの淵へ行けという命令を出さないようにと懇願した。

この奇跡において、レギオンという言葉が「鍵」であろう。レギオンは6～8千人で構成されるローマの重武装軍団である。レギオンが行軍する所は、死者が累々と折り重なる恐怖の場と化す。彼はレギオンに取りつかれ、自らを傷つけ、他者に恐怖を与え、死の墓場に住み着いた。異教のゲラサでは多くの豚が飼われていた。悪霊は豚の中に入っていく許しを願った。主イエスがお許しになると、悪霊は豚の中に入った。すると、豚の群れは暴走し始め、一気呵成に湖になだれ込み、皆溺死した。理解できない奇跡である。

私は、豚の止まることを知らない暴走と自らが溺死していく奇妙な光景から、軍隊の本質を見る。日本は天皇を担いで明治政府を樹立した。富国強兵を図り、近代化を目指した。そして、日清、日露戦争に勝ち、アジア太平洋戦争へと突き進んだ。後半は、敗戦が続く中、無謀な玉砕命令、神風特攻隊、人間魚雷の回天、片道の油しかない戦艦大和を沖縄に向けた。軍隊は止まることを知らず、自らが死ぬまで突進していく。暴走した豚の群れは日本の軍隊と重なる。シビリアンコントロールは軍隊の本質を抑える英知である。

オドロオドロしい奇跡はマルコ福音書からの伝承記事であろうが、マルコはローマの重武装軍団の狂気を知っていたのではないか。どのように読んでいいのか分からないが、諸々の想像が膨らむ奇跡物語である。(続く)